

# 新年を迎えて

国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構 津 田 新 哉  
中央農業研究センター病害研究領域長

新年、明けましておめでとうございます。皆様におかれましては穏やかな新春をお過ごしのこととお慶び申し上げます。

旧年を振り返り見れば農業生産に被害を与えた災害の数々が思い起こされます。新年度に入って間もない4月には、マグニチュード6.5と7.3の地震が一日を挟んで間髪入れずに熊本県と大分県の一部を襲い、約2,500名に上る死傷者を出す凄惨な災害が発生しました。農業関係でも農地や施設を中心に両県合わせて1,000億円以上の経済被害が発生し、いまだに復興が滞っている地域もあると伺っています。また、春先から西日本のタマネギ産地を襲ったべと病による記録的不作や、夏季の度重なる台風の襲来で東北地方や北海道で河川氾濫や堤防決壊が起こりタマネギ、トウモロコシ、ジャガイモ等の収穫直前の圃場の約21,800haが冠水するなどして甚大な被害が生じました。これにより、東京市場の野菜が全面高の展開となるなど一般社会にも多くの影響を与えました。被災された皆様には筆舌に尽くしがたい悲しみに襲われたことと、心からお見舞いを申し上げます。それとともに、本年が穏やかで一日も早い復興・復旧が成就し、多くの皆様にとって幸せな一年となりますことを祈念いたします。

さて、二十一世紀の幕開けと同時に産声を上げた政府系独立行政法人も、5年一期の中期計画を三期経て、本年度4月から第四期に突入しました。農林水産省を主務官庁とする国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構（以下、農研機構）は、第三期まで単独法人であった国立研究開発法人農業生物資源研究所、国立研究開発法人農業環境技術研究所および独立行政法人種苗管理センターと統合されてその傘下に20組織を擁する巨大な国立研究開発法人へと発展しました。「新生」農研機構では、農業・食料・環境に係る課題でグローバルな視野の下に、研究開発から成果の社会還元までを一体的に推進し、安全な食料の安定供給、産業競争力の強化、環境保全および新たな価値の創造を通じて、我が国の地域と社会の持続的発展に貢献することをその第四期中長期目標に掲げています。

その中で展開される病害虫研究では、持続型営農システムの実現に向けた技術体系の確立においては飛翔しない天敵などを用いた対策技術、施設園芸では総合的病害虫管理を核とした生産体系、土地利用型作物では耕種的

な病害虫・雑草の被害軽減技術を組合せた有機栽培体系等を確立します。安全・信頼の確保のための果樹生産の高付加価値化技術の開発では、リングなどの寒冷地果樹で土着天敵を活用したハダニなど病害虫防除技術、ブドウおよびカキで枝幹害虫に対する効率的な防除技術を開発します。茶では病害虫の生態解明などに基づく高度発生予察法を利用したIPMモデルを確立します。病害虫のリスク管理技術の開発では、輸出先国で重要問題となる病害虫の寄生性などの科学的知見の集積を図ります。加えて、輸出相手国が求める残留農薬基準などの水準を満たす輸出型防除技術、我が国で未発生病害虫の侵入を阻止する検出・同定技術、検疫有害動植物の検出・診断法、薬剤抵抗性病害虫の発生予測技術等を開発します。環境問題の解決では、生物間相互作用などの解明に基づく病害虫制御技術、効果の高い土壤消毒法、抵抗性誘導や非病原微生物による病害抑制技術、光や音波等の物理的特性を利用した防除技術、土着天敵の利用技術等を開発します。微小害虫などが媒介するウイルス病の制御も視野に入れ、公設試などの連携に基づく生産現場での実証試験を通して全国の各産地に新技術を導入していくことを計画しています。

ところで、平成28年1月に閣議決定された第五期科学技術基本計画では、我が国の科学技術イノベーション政策を経済、社会および公共のための主要な政策として位置付け、技術開発面から強力に推進していくことを定めています。本計画では、世界に先駆けた「超スマート社会（Society 5.0）」を実現するため、情報通信技術（ICT）、人工知能、ビッグデータ等の基盤技術を一層強化することで我が国を「世界で最もイノベーションに適した国」に先導し経済の好循環と豊かな人間生活の実現を目指しています。この計画では農業にも言及しており、ICTやロボット技術を活用した低コスト・大規模生産等を可能とするスマート農業や新たな育種技術等を利用した高品質・多収性の農林水産物の開発を推進し、新たなビジネスモデルを構築して農林水産業を魅力ある産業にすると謳っています。病害虫研究においてもICT技術を利用した早期診断技術さらにそれと連動した防除体系等の確立が求められ、その神髄は農水省の技術開発目標にも明確に掲げられています。農研機構傘下の研究機関のみならず、大学、全国の公設試および民間企業との連携により精度の高い最新技術を開発していかなければなりません。皆様とともに二十一世紀に相応しい病害虫研究を大いに発展させて参りたいと存じます。本年もどうぞよろしく願い致します。